

八・九世紀の神社行政

——官社制度と神階を中心として——

はじめに

律令国家の思想的支柱は神祇信仰ではなく、仏教思想であったと言われ、仏教の持つ国家鎮護の教説が神祇の効験よりも律令国家の思想的支柱となり得る要素を多分に持っていたと考えられている。^①ところが、最近の研究により「未開宗教である古代神道の伝統が、世界宗教としての仏教を受容したにもかかわらずその中に吸収されてしまわなかった」^②点に日本思想史の特性を求める指摘がなされるようになった。確かに神祇信仰は律令国家の支配体制を保証する社会心理的機能は果し得なかった。その機能を補完するものとしてむしろ仏教に期待が寄せられたのではあるが、「神道の底層と仏教的表層」という表現が端的に示すように、神道の底層は仏教的表層に大きく影響されながらも完全には埋没しなかったのである。こうした神祇と仏教の交流を通して古代神道の神々の性格も、(1)「荒ぶる神」↓(2)「怨む神」「苦しむ神」↓(3)「護法神」という三段階の変容に迫られる。^③第三段階の仏教を擁護する護法善神の神という観念は本稿で考察しようとする神階奉

授や昇叙などの現象として具体化する。本来、官人社会でのみ生かされてきた俗界の秩序Ⅱ位階制度が特に平安時代承和・貞観年間に顕著に神々の世界にも適用されるに到った背景には以上のような仏教と神祇の複雑多岐な相互干渉を想定しなければならないであろう。一般に神階は「神社の尊貴・格式を示す一表現」と考えられているが、^④官人の場合と異なり位階に伴う封戸・位田等の経済的給付を付随させたものではなかった。今一つ、神社に与えられた特殊な待遇として官社化の事象がある。

従来、神階奉授の問題は一方に官社制度の成立・展開の問題を内包していた。両者の前後関係には、①神階奉授↓官社化、②官社化↓神階奉授、③神階奉授と官社化が同時なもの、の三形態があることが知られている。^⑤官社化されるということはつまり、神名帳に登録され、祈年祭や月次、新嘗、相嘗祭などの班幣を受けることの二項目であり、原則上はその二つが同時に満たされねばならなかった。

本稿では神階奉授と官社制度との連関を探るため次の三点に重点を置いて考察を進めてゆきたいと思う。

巳 波 利 江 子

(1) 両者の相関関係の有無はまず、それぞれの成立期にも関わっていると予想される。この予想から神階制度と官社制度の成立史を明らかにしたい。

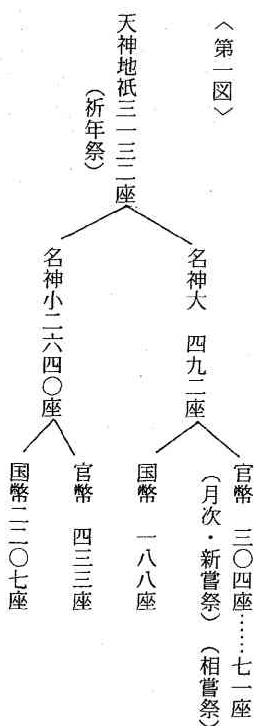
(2) 奈良時代の神階奉授・官社制度は、平安時代のそれらとは趣を異にしている。そこで奈良時代の神階・官社の具体的実相に迫り律令国家における歴史的位を確定したい。

(3) 従来の官社制度・神階奉授の研究において、その中核的史料は嘉祥三年（八五〇）と同四年の太政官符であろうと思われる。その両官符が実際上どのように展開したかを浮彫りにした上で平安期以降しばしば見られる名神事例の官社制度史上に占める意義を追究したい。

第一章 奈良時代における官社制度と神階

第一節 官社制度の成立

『延喜式』巻九・十によると全国の式内社三三三座は次の第一図のように分類されている。



各祭祀に預かる座数の相違は各祭祀の成立時期と不可分の関係があると考えられている^⑥。つまり、月次・新嘗祭が「ヤマトを基盤とする地域的王権が古来執行してきた祭祀」として、「律令国家の成立過程において新たに国家の祭祀として設けられた」祈年祭よりも、より古い段階の宮廷祭祀であると指摘される^⑦。

また、式内社か式外社かの区別の基本的要因は祈年祭に預かるか否かに懸かっており、従って律令制下の官社制度を考える上では祈年祭の成立は不可避的な問題となるであろう。

『年中行事秘抄』二月の項には、

四日。祈年祭事。廢務。有前後斎。

周礼日。祈年求豊年也。

官史記云。天武天皇四年二月甲申。祈年祭。

と、天武四年（六七四）の二月に祈年祭の行なわれたことを載せている^⑧。『年中行事秘抄』が天長格や月旧記などその他の古書の逸文を多く引用していることから、右の官吏記も左右弁官の前身官司の記録と推測でき、まず信用して差支えないであろう^⑨。さて祈年祭の確実な初見を天武四年とするのはよいとしても、その祈年祭が神祇令にいう「其祈年月次祭者。百官集神祇官。中臣宣祝詞。忌部班幣帛。」のような形態を果してとったのか、また規模の点においての三三三座を対象とするような祭祀であったと考えてよいのか等、多くの疑問が残る。

渡辺晋司氏などによって鋭く指摘されてきたことではあるが、いまだ一度祈年祭の際の班幣行事の地域的拡大について簡単に触れておく。核

心的な史料のみ挙げ、他の類例は割愛する。

(イ)班幣於畿内天神地祇。(持統四・正・庚子)

(ロ)惣頒幣帛於畿内及七道諸社。(大宝一・三・己卯)

祈年祭の祭日は『延喜式』では二月四日と規定されているが、養老神祇令ではただ仲春とあるのみで具体的な日は明らかでない。右の(イ)における班幣行事は二月に近い正月及び三月に行なわれた点から考えて、祈年祭を契機とするものと見做してよいであろう。注目されるのは(イ)と(ロ)の班幣対象地域の相違についてである。持統四年(六九〇)段階では「畿内」だけを対象としているのに対し、大宝二年(七〇二)段階では「畿内及七道諸社」と地域が拡大されている。また大宝二年に近い慶雲三年(七〇六)には「是日。甲斐・信濃・越中・但馬・土佐等一十九社。始入祈年幣帛例。」とあり、祈年幣帛の例に入ったのはいずれも畿内から外れている。^⑫以上の点から祈年祭班幣の対象地域の拡大された時点を大宝二年頃と断定してよいと考える。畿内に限定されていた祈年祭執行が大宝二年以降全国的規模にまで拡大したことは、大宝令の施行と軌を一にした全国的な官社制度の成立を意味するものと言わねばならない。換言すれば、大宝令以前の畿内的小規模な官社制度は、「神祇制度自体も政治・行政的・軍事的に区切られた畿内から一步も出ない、いわば天皇祭祀権の畿内的かつ身内の制度」^⑬の一環としての性質を超えるものではなかった。

『古語拾遺』にはその間の事情を「至大宝年中。初有記文。神祇之簿猶無明案。望秩之礼未制其式。至天平年中。勘造神帳。」^⑭と説明する。

「記文」の解釈が分かれるところであるが、『続日本紀』慶雲三年(七〇六)二月庚子条の注「其神名具神祇官記」から私は「記文」を神祇官記のようなものと推定し、大宝年中に初めてまだ不十分ながら、所謂「神名帳」「神祇官記」と類似の「記文」があったと解釈しておきたいと思う。

以上のように解釈したならば、大宝令以降地方の神社を中央の神祇官が把握する状況をその背後に読み取れるのではなからうか。これはまた、大宝令直後における全国的な官社制度の成立を端的に示すものと言える。^⑮官社制度の全国的な成立までの、徐々に整備されてゆく過程は中央官制の中の神祇官機構の成立史と不可分の関係にあると思われる。^⑯浄御原令制下に律令神祇官制の実質的な成立をみたが、当時は大和を中心とした畿内の神々を神祇官の監視と支配の中に吸収してゆくとどまっていた。それがより一層明確に全国的な官社制度として結実するのが大宝令以降であり、私は八世紀初頭にその成立時点を求めたい。以後しばらく地方神社の官社化が盛行したことは想像に難くない。

官社数の増加は神社間の序列関係、即ち神階の問題をもたらした。次節から、この神階と官社化との相関関係を中心に、官社制度の質的变化を探ってみたい。

第二節 神階奉授の事例検討

『続日本紀』以下の国史には、各地の神々に位階(神階)を贈与し

たり昇叙したりする記事が散見する。神階をめぐる史料は相当な量に及ぶが、具体的な内容を物語るものは少なく、神階奉授・昇叙の理由が明記されているものは頗る限られている。加えて従来の研究が主に地方神社の官社化と神階との相関関係を追究することに重点が置かれ、相方の意味する社会的意義、ことに官社化・神階奉授のもたらす社会的メリットについては捨象されてきた感があり、未だ全体的把握には到っていないように思われる。^{①⑧}それは特に、平安期以降の飛躍的な史料の増大によって主眼が平安期に偏重していた傾向と、併せて八世紀初頭から九世紀末までに亘る約二百年間の事象を一律にとらえようとした点に盲点が存在していたようである。

本節においては官社化と神階との相関関係を追究するため、奈良時代の関係史料を検討し直し、併せてその社会的意義について言及することとしたい。第二章で詳しく述べるが、従来の研究史において官社化と神階奉授の関係については、

(A) 神階は官社追求の手懸りとして相関関係を認める説^{①⑨}

(B) 神階と官社化とを同次元には考えず、相関関係を認めない説^{②⑩}

の二つの説が提起されてきたが、(A)説には既に説得的な批判が出され、今日では(B)説が一般的に認められている。しかし先に述べた如く、八・九世紀を総括的に同じ尺度でとらえた限りでの可能な説と言え、律令制の変質とともにその質的意味合いも随分変化している筈である。私見においては(B)説の立場に大筋において賛成するものの、全く別個の制度とは考えず、その内的連関を認めるものである。

官社についての国史上最初の具体的記事は、『続日本紀』大宝二年(七〇二)七月癸酉条にみえる、

在山城国乙訓郡火雷神。每旱祈雨。頻有徵驗。宜入大幣及月次幣例。

の記事である。この火雷神は喜祥三年(八五〇)從五位上に叙せられ、^{②⑪}次いで貞観元年(八五九)には正五位下から從四位下に昇叙されている。また『延喜式』には「乙訓坐大雷神社^{新嘗}名神大。月次」と記載される神社である。從五位上から正五位下に昇叙された時期は不明であるし、かつ別表の「事項」に掲げておいた官社化表現の記述型式も整然性を欠いている点を考慮に入れれば、^{②⑫}預官社記事や神階奉授の記事の取り上げ方には一貫性がなく、史実でありながら記載されなかった例も相当数存在したであろうことが当然予想される。

一方、神階奉授についての国史以外での初見は『新抄格勅符抄』大同元年牒に載せられている、越前国氣比神を天平三年(七三二)、從三位に叙した例である。^{②⑬}また『東大寺要録』卷四に収録されている宇佐八幡宮の例、即ち

天平三年陳顯神驗。奉預官幣。(中略)天平十八年天皇不豫。禱祈有驗。即叙三位。

の記事は天平三年(七三二)に官社化されたこと及び天平十八年(七四六)に三位に叙せられたことを示している。しかし「天平十八年」が天平十七年の誤記であったり「三位」が正・從いずれか不詳であることから、^{②⑭}この所伝の信憑性は疑問であると言わねばならない。次に

〈第一表〉

年月日	神名	事項	理由	その他	延喜式
(七四九) 天平勝宝元・12・丁亥	(豊前) 八幡大神 比咩神	↓品奉 ↑品奉			名神大
(七六〇) 天平神護2・4・甲辰	伊予国神野伊曾乃神 越智郡大山積神 久米郡伊予神 野間郡野間神	↓從四下 ↓從五下 授			名神大 名神大 名神大 名神大
(七七二) 宝龜2・10・戊辰	越前国刺神	(從四下・六等)			小
(七七四) 宝龜5・3・丙午	越前国丹生郡雨夜神	↓從五下 叙			小
(七七七) 宝龜8・7・乙丑	(常陸) 鹿嶋社 (下總) 香取神	↓正三位 ↓正四位上 叙	内大臣從二位 藤原朝臣良藤		名神大 名神大 名神大 名神大
(七八〇) 宝龜11・12・甲辰	越前国丹生郡大虫神 越中国时水郡二上神 磯波郡高瀬神	↓從五下 叙			小
(七八二) 天心2・5・壬寅	(常陸) 鹿嶋神	(正三位) 差授	陸奥国前		名神大 新賀 月次
(七八二) 延暦元10・庚戌朔	伊勢国桑名郡多度神	↓從五下 叙		(八五〇) 嘉祥3・9・甲申 列於官社	名神大 新賀 月次
(七八三) 延暦元・11・丁酉	(大和) 田村宮今木大神	↓從四上 叙			小
(七八三) 延暦2・12・丁巳	大和国平群郡久度神	↓從五下 叙			名神大
(七八四) 延暦3・3・丁亥	(能登) 氣太神	(從三位) 叙			名神大
(七八四) 延暦3・6・辛丑	(能登) 氣太神	(正三位) 叙			名神大
(七八四) 延暦3・8・壬寅	(能登) 氣太神	(正三位) 叙			名神大
(七八四) 延暦3・11・丁巳	(能登) 氣太神	(正三位) 叙			名神大
(七八四) 延暦3・12・丙申	(能登) 氣太神	(正三位) 叙			名神大
(七八四) 延暦5・12・辛巳	(山城) 松尾神	(從五下) 叙			名神大
(七八四) 延暦10・4・乙巳	(越前) 大虫神 足羽神	(從五下) 叙			名神大
(七八四) 延暦10・9・甲子	佐渡国物部大神	↓從五下 叙			小

『続日本紀』の神階奉授の記事より、検出できる結論をまとめてみる。

① 神階奉授の理由はほとんどの場合明記されておらず、いきおいその前後関係から推定せざるを得ない。

② 『延喜式』に記される神社間の序列 (名神小→名神大→月次相賀新嘗祭に預かる名神大) は、神階の現われる奈良時代より神階上の格差として現われている傾向がある。

③ 官社化の記事が明確に記されているのは伊勢国多度神と大和国久度神のみであり、他の神の官社化は神階記事の以前か以後か詳かにし得ないが、おそらくは神階奉授以前に既に官社化されたものと推測する。(以上、第一表より)

④ に関しては上田正昭氏の論考があり、このような神階奉授の背景として遷都や征鎮、氏神への奉養、対新羅関係との深刻化あるいは渤海との交渉の活発化などを指摘され、それらを契機とした神階奉授であることを示された。²⁷⁾ また同時に本質的には「神階奉授の前提には、仏教が優位となった律令国家のありようが照射されており、神も仏法を擁護する『護法善神』の神とされて、『人神』観がますます具体化してきた様相があった」と、当時の社会のイデオロギー的側面から神観の推移を想定されている。確かに奈良時代を彩る仏教色豊かな風潮は、国分寺・国分尼寺の建立を始め東大寺大仏建立に代表されるように、従来在地に根付いていた精神的紐帯としての地方神社にその影響を及ぼしたであろうことは容易に想像できる。しかし、人々においての苦悩救済や祈願成就の達成は神か仏かの二者択一の問題には

拘らず、両者混同の信仰形態をおそらくはとったであろう。奈良時代中期以降より頻繁化してくる神宮寺の出現や神前読経といった事情がそれを裏付けている。²⁸⁾

そこで、第一表中より神階を奉授された神々の内、以後比較的良好な昇叙状況のわかる神を数例取り上げ、神階の具体的な実態を辿ってみることにする。

(1) 越前国気比神（名神大）

天平三年（七三一）に従三位に叙されて以降、最終記事である貞観元年（八五九）に正二位勲一等から従一位に昇叙せられるまでの間、官社に列せられたという記事は全く見当たらない。天平三年の時点で既に従三位という高位を得ていることからすれば、官社化の時期は天平三年以前と考えるのが妥当かと思う。七二〇年代からの対新羅関係の緊張化に即した叙位と考えられているが、²⁹⁾ 国際関係を契機とする叙位や奉幣がこの神社に縁の深いものである場合が他にも見られる。例えば承和六年（八三九）八月には遣唐船の漂流に即して神祇官中臣氏を遣し、摂津国住吉神とこの気比神に幣帛を奉っており、海上守護の神としての役目を演じている。³¹⁾ また延暦二十三年（八〇四）六月丙辰条に、
制。常陸国鹿嶋神社。越前国気比神社。能登国気多神社。豊前国八幡神社等宮司。人懷競望。各称譜第。自今以後。神祇官檢舊記。常簡氏中地事者。擬補申官。
と、鹿嶋・気多・八幡の神社と並んで人々（おそらく一、三の氏族が独占していたであろう）が宮司の地位を譜第出身と称して競った様が描か

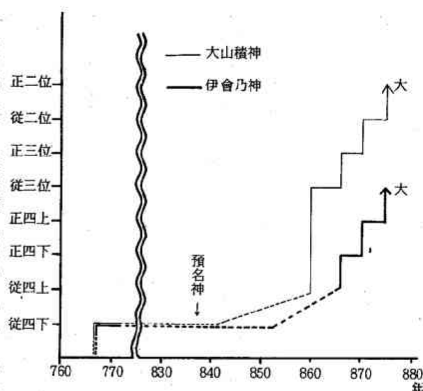
れ、気比神の宮司職を榮譽と考えていた風潮をしのばせている。

(2) 豊前国八幡大神・比咩神（名神大）

宇佐八幡神と東大寺大仏建立との関係は従來說かれているように、そこに神仏習合の原初形態を見出すことができる。³²⁾ 文献上宇佐が最初に登場してくるのは養老五年（七二二）六月戊寅条の僧宇佐君法連と思われ、東大寺造立に当たって宇佐八幡の仏法擁護の教理を生み出す上に影響を及ぼした人物であろうと思われる。天平勝宝元年（七四九）十二月丁亥、八幡大神の託宣を奉じて入京した称宜大神朝臣杜女に従四位下、主神司大神朝臣田麻呂に外従五位下が授けられると同時に、八幡大神・比咩神にはそれぞれ一品・二品が与えられている。特に注目されるのが、その神階が品位であったことであろう。³³⁾ 品位を奉授された神は備中国吉備津彦命と淡路国伊佐奈岐命との三神のみであり、本来親王に限って与えられる品位が奉授されたことの理由に挙げられるのは以上の三神が他神とは異なった神格の所持、例えば八幡大神は菅田皇子説の流布によるものとされている。

(3) 伊予国伊會乃神・大山積神・伊予神・野間神（名神大）

伊會乃神・大山積神は天平神護二年（七六六）にはいずれも同じ神階の従四位下を得ているが、のちの史料においては同日に揃って神階の昇叙が行なわれているものの、その神階には幾分差違がみられる。結論から先に述べれば、神階の高下は同じ官社間にあっても名神に預かるや否やの一点に左右されると言っても過言ではない。次に伊會乃神と大山積神の神階昇叙の比較表を作成した（第二表）。『延喜式』で

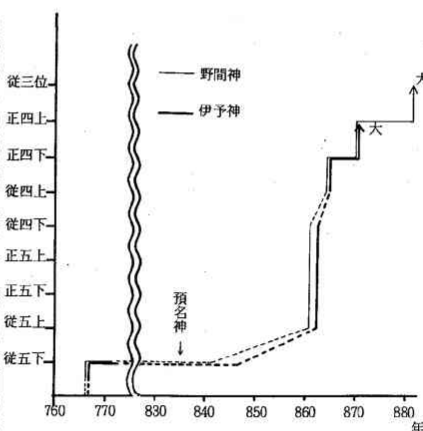


＜第二表＞

は両神とも名神大となっているが、片や伊會乃神については預名神の時期は不明である。貞観十七年（八七五）以降と考えるのが適当かと思うが、その点はひとまず保留しておくとして、承和四年（八三七）名神化された大山積神の神階が一挙に三階も加進しているこ

とにはやはり注意が必要であろう。天平神護二年（七六〇）に揃って從四位下が与えられ、しかものちの昇叙記事において一組として登場してゐる二神の内、何故大山積神だけが名神化されたのか、その辺の事情は全く予想する術もない。ただし名神化によって神階の優遇措置がとられたことは第二表より読み取れるものの、名神化の時期と三階昇叙の時期に三十三年の隔たりのあるのが、一考を要する問題となるう。

次に伊予神と野間神を考えてみる。野間神に関しては承和四年（八三七）に預名神記事が記されているが、片方の伊予神については記載がない。第三表の神階昇叙の状況から判断するに、承和四年に近い時期に名神化されたと考えるのが妥当ではないかと思われるが、やはりこの例も名神化による神階の飛躍的加進を示しており、それが神祇制度の変革を試みた（第二章）九世紀半ば以降でみられる現象であるこ



＜第三表＞

とに注目したい。「文位が時代の下るにつれて漸次加階され、次第に神社序列の上に占める意識が薄れてゆく」^④状況を以上の例に検出することはできない。神社への位階奉授が圧倒的に増加する平安期にあっても、尚且つ

神階のもつ意義、換言すれば神社間の序列整備という意味合いが稀薄化されたということはできないのである。神階の濫授の風潮にあっても、相対的にとらえれば、非官社よりも官社、単なる官社よりも名神、というように神階による差違が付けられていたと考える。次節で触れるが、ただし制度史上官社という実質が律令制初期に比して次第に形骸化してゆくことは否定できない。名目的・型式的となってゆく官社制度に反して、神階は本稿で取り上げた九世紀末までは極位に昇るまで漸次加階され、神格の上下関係を示す上で重要な機能を果たしていたのである。

(4) 常陸国鹿嶋神・下総国香取神（名神大。月次新嘗。）

鹿嶋神に関しては天平宝字二年（七五八）より神賤のいたことが確かめられ、延暦七年（七八八）には陸奥国多賀城に徴発されている。^⑤時代は下るが『続日本後紀』承和三年（八三六）五月丁未条及び同六

年（八三九）十月丁丑条には祭神建御賀豆智命が勲一等であったこと、また天長十年（八三三）には祝外従八位上勲八等中臣鹿嶋連川上の名も見え^{④③}ることから推せば、鹿嶋神が東北征夷のための軍事的役目に功を奏した結果の勲位と考えられる。貞観八年（八六六）には「大神之苗裔神卅八社在陸奥国」とあり^{④④}着々と東北へ根城を拡げ東北経営に乗り出していたことが窺われる。一方、香取神の方も元慶六年（八八二）には「正一位勲一等香取神社」とあることから^{④⑤}、鹿嶋・香取両神社ともおそらくは八世紀中々末期には極位に達し、奈良時代に早くから高い神階を奉授されている能登国気太神、摂津国住吉神・山城国賀茂上下二神社同様、古くから高い神格として特別に扱われていたであろうと思われる。また、奈良時代中期に既にそれぞれ正三位・正四位上の高位を得たことの背景には藤原氏の氏神としての神格保持の画策があったことも見逃せない。

(5)大和国今木大神（平野祭神四座。並名神大。月次新嘗。）

高野新嘗が居住したと言われる田村後宮（平城京左京四条二坊十一坪付近に比定）でまつられていた今木大神は平安遷都に伴って、平野神社の主神に納められた^{④⑥}。平野神社には今木神の他、久度神・古開神・合殿比咩神の四神が鎮座している。今木神の神階の跡を辿れば、他の三神とはまた別格に扱われていることに気付くが、いずれにしても神階奉授の単位が神社ではなく、神単位となっている点が注目される。官社化された時期は不明だが、この今木神も最初の神階記事のあった延暦元年（七八二）以前と考えられるのではなからうか。あるいは、

この神が田村後宮で私的に奉祭されていたという事情から推察すれば、官社化されたのは延暦十三年（七九四）、平野神社へ移祀されてのちとも考え得るが、明瞭な確証はない。

承和十年（八四三）十月十七日壬申条には「平野社一前。預之名神」とあって、ただ一神のみが名神に預かっている。一前とは承和三年（八三三）ノ嘉祥元年（八四八）の間に合祀されたいらしい合殿比咩神を指すと考えられているが、注意したいのは名神化も一社全体をまとめて一時になされるのではなく、個々の神単位にしかも時期を相互にずらせてなされることを示している点である。「人神」としてとらえられていた当時の風潮より、平野社のようにまつる神が四神という一社複数神の形態をとる神社においては、神社単位ではなく神単位の神社行政施策がとられたのであろう。

以上(1)～(5)まで神階奉授の跡の比較的多く残る神を取り上げて概略を述べてきた。奈良時代の神階奉授記事を中核として、その前後に官社化されたという記載を大概において見出すことはできない。大宝令以降、中央集権化を目指す国家的気運の昂揚に沿って地方神の官社化は加速的に推し進められたと考えられる。第一表中の神のほとんどが官社化記事を持たないとなれば、神階を奉授される以前、既に神名帳ないしは神祇官記に名を列する官社として登録されていたと考えられよう。

ただし伊勢国多度神の一例だけは延暦元年（七八二）に従五位下に

叙されてのち、約七十年隔てた嘉祥三年（八五〇）に「列於官社」と記されている。^④これはどう理解すべきであろうか。嘉祥三年という時期が意味を持っているようであるが（第二章）、それは後述することとして次の『多度神宮寺伽藍縁起資財帳』が重要な示唆を与えてくれる。^⑤

以去天平寶字七年歲次癸卯十二月庚戌朔廿日丙辰、神社之東有井、於道場滿願禪師居住、（中略）託神云、我多度神也、吾經久劫作重罪業、受神道報、今冀永為離神身、欲歸依三寶、如是託訖、（後略）

右から多度神が天平寶字七年（七六三）頃、神身を離れ三寶に帰依を願う「苦しむ神」の段階にあり、既に神仏習合への移行期にさしかかっていたことが察せられる。とすれば、多度神は神階に対しては何ら躊躇・辞退するものではなかったけれども、官社として神祇官の下に敢えて置かれる積極的な必要性を持たなかったのではなからうか。充分説得的な推測とは言い難いが、多度神の特異性を裏付ける一端にはなり得ると思われる。

第三節 官社化と神階の相關関係

第一表でみたように奈良時代に神階を奉授された神々のほぼ全てが官社に組み込まれた時期を明らかにしていなかった。しかし、のちの神階状況から判断して、当時既に官社に列せられていたのであり、単に『続日本紀』がその史実をとどめなかったに過ぎないと想定した。では、官社列格の時期を明確に示す神の方はどうであろうか。

『続日本紀』中の官社化記事は九例三十八神を実数として数え上げることができる。（別表）先述『古語拾遺』の「至天平年中、勘造神帳。」の記載は、『続日本紀』天平九年（七三七）八月甲寅条の、

其在諸国能起風雨為国家有驗神未預幣帛者。悉入供幣之例。

と決して無縁ではないであろう。同年四月以来の疫病は藤原四卿を次々と倒し、また「疫旱並行田苗焦萎。由是。祈禱山川。奠祭神祇。未得効驗。至今猶苦。」^⑥という状態で、「天下百姓死亡實多。百官人等闕卒不少。」^⑦という無残な結果をもたらすことになる。聖武天皇はこの事態を「良由朕之不徳致此災殃。」^⑧ととらえ、国家のために効驗を現わし未だ幣帛に預からない神を悉に供幣の例に入らしめたのであった。具体的にどれ程の神がその対象とされたかは明らかでないが、この施策によって、官社数は一層増加したであろうし、それに対応して新たに「神帳」を造る必要が生じたのではなからうか。

大宝以降、官社の数が漸次増えてきたであろうことは天平五年（七三三）に撰進された『出雲国風土記』によっても立証される。出雲国における一八四社という官社数は『延喜式』に収録された一八七座とそう大差はない。ということは、出雲国が特殊か一般かという問題は別にしても、天平五年当時に既に十世紀初頭の『延喜式』段階とほぼ同数の官社が成立していたことになる。諸先学によって指摘されているように、^⑨『出雲国風土記』中の郡別の官社率を算出した場合、うち意宇・神門・出雲・大原の四郡の官社率が高いことが突き止められている。この四郡の内三郡が出雲臣・神門臣・日置部臣という出雲

国の有力な豪族の本拠地であることから、関和彦氏は「有力豪族が在地支配の動搖を在地の神社を官社として位置づけることにより率先して切り抜けようとしたあらわれ」と理解される。⁵⁴ 妥当な見解であろう。

出雲国の例を他に敷衍することは無理かもしれないが、八世紀初頭より天平期に到るまでの間に飛躍的に官社数は増加したと予想され、またその時点では在地豪族層の積極的な中央統制への組み入れ姿勢を反映していたと考える。つまり、そこからは中央神祇官による統轄と、下からの在地豪族の要請との接点が目くみ合っていた段階を想定できるのではないだろうか。ところが両者の接点は時のたつにつれ、微妙なずれを生じ次第に増幅していったと私は考える。中央神祇官においては、天照大神を皇祖神とする神祇信仰の国家的レベルでの整備編成を意図していたのであり、次第に地方神が官社として画一的に同じレベルの横関係として並んでゆくと、今度は必然的に神格の高下による調整を考慮せねばならなかったのではないか。

以上の憶測が正しいとすれば、神階が顕在化してくるのは官社数のほぼ出揃った天平期以降と結論できるであろう。⁵⁵ 本来、官社制度と神階はその制度発足の当初においては全く別の目的で作られ、ことに神階は官社制度の副次的産物であったといえることができる。非官社であっても神階を奉授される例(宝龜十二年越中国三上神を従五位下に叙した例)が見出せるのも、官社と神階の相関関係を認めない(B)説を支持しよう。ただし、二上神のような例が宝龜十一年(七八〇)を初見とすることが、官社の実質の形骸化の始まるのを八世紀中々末期と考える私見を

傍証してくれる。『類聚三代格』卷一の貞観十年(八六八) 六月廿八日の太政官符に、

謹案太政官去寶龜六年六月十三日符傳。右大臣宣。頒幣之日祝部不参。自今以後不得更然。

と、宝龜六年(七七五)の太政官符を引用し、幣帛を受け取りに來ない祝のことが問題となり始めていたことを記している。諸社の祝の怠慢は眼に余る有り様であったらしく、『続日本紀』宝龜七年(七七六)八月丙辰条には、

遣使奉幣於天下群神。其天下諸社之祝。不勤洒掃。以致蕪穢者。収其位記。与替。

と、神社の汚穢を祝の怠慢の結果をとらえている。同様な主旨の太政官符は翌八年三月十日にも出されており、ここに弛緩し始めた神祇祭祀の様相を見ることができよう。⁵⁶

宝龜六年の太政官符以後、諸社の祝が幣帛を受け取りに参集したかどうか定かでないが、平安期に入っても尚、祝部不参への対応策が出されていることから考えれば、官符の徹底は困難な問題であったのだだろう。『類聚国史』卷十の祈年祭の項には、次のように載せられている。

延暦十七年九月癸丑。定可奉祈年幣帛神社。先是。諸国祝等毎年入京。各受幣帛。而道路僻遠。往還多艱。今使用當国物。

延暦十七年(七九八)以前、諸国の祝らは毎年入京して幣帛を受けねばならなかった。宝龜六年(七七五)に「頒幣之日祝部不参」とい

う有り様で、「自今以後不得更然」と綱紀肅正を訴える中央政府であったが、その後も相変わらず「祝部不参」は続いたのである。その原因は道路僻遠で往還に難が多いために他ならなかった。延暦十七年（七九八）に到って『延喜式』に載せるような官幣社と国幣社に分けたというのである。

官社が官社として最低限もちうる必要条件の一つには祈年祭や月次・新嘗・相嘗祭の班幣を受けること、つまりは神祇官統制下に置かれることが義務づけられていた筈であった。ところが八世紀後半に入ると、次第に班幣を受けるといふ行為は放棄の状態となり、有名無実化の一途を辿る。官社化や神階奉授はその極く初期においては中央権力による地方支配のための積極的な政策であったろう。奈良時代における献物叙位の状況を顧みても地方豪族たちが如何に官位を獲得することと躍起となっていたであろうか。⁶⁷⁾しかし、八世紀後半から、もはや「官」の権威は後退化しつつあり、官社か非官社かはさしたる問題ではなく、専ら神階のみ得る傾向が著しくなつてゆく。『日本後紀』以下の六国史に載せる神階関係の記事数に比べて、官社化記事は少ないとは言ふものの、尚、官社化を求める風潮の残滓をそこに見出すことができる。ただ奈良時代と異なる点は官社たる必要条件の班幣の比重低下、裏返せば「神名帳」に名を列ねるだけに意義を見出すような官社の有り方、ともう一点は祝部不参への処罰を規定した太政官符を数回に渡って出さねばならないという中央神祇官の統制力衰微の併せて二点を指摘できよう。官社制度成立の初期においては、神祇

官の地方神社統制の色合いが濃かったものの、奈良時代後期に入つてからは在地の豪族が官社制度を逆利用し始めたと考えられよう。そこに、中央政府と在地豪族との力関係の逆転を見出すことが可能ではないであろうか。

第二章 平安時代における官社制度と神階

第一節 嘉祥三年太政官符の検討

『日本後紀』以下の国史には神階奉授の記事が頻出している。神階を奉授する現象は承和・貞観年間（八三四～八七六）にピークを迎え、またその時期は地域的にも又奉授される神階においてもバラエティーに富んでいる。別表の官社化記事を同様に件数としてとらえれば、ほぼ神階の傾向と等しくなるであろう。もっとも官社化記事や神階奉授・昇叙の全てが網羅されているわけではなく、国史編纂者の恣意に左右されることが多かったであろうから一概に断定はできないものの、前述した如く大宝・天平年間を官社化の第一期・ピークとするなら、承和・貞観年間は第二期・ピークに該当していよう。

一方、神階制度は官社制度より遅れて始まったが、徐々に一般的なものとして浸透してゆき、承和・貞観年間に第一期のピークを迎えると思われる。

再度ここで、官社と神階との関係に論を移してみたい。第一章第二節の(A)・(B)両説にとって根幹的史料となった、嘉祥三年（八五〇）十

二月廿八日及び嘉祥四年正月廿七日の太政官符を紹介しておく。⁶⁹

太政官符

応国内諸神不論有位無位叙正六位上事

右太政官去年十二月廿八日下五畿内七道諸国符備。右大臣宣。奉勅。特有所思。天下大小諸神。或本預官社。或未載公簿。有位更増一階。無位新叙六位。唯大社并名神雖云無位奉授從五位下者。而今推量。六位之中其階有四。至于奉行必應有疑。宜除奉授從五位之外。不論有位無位共叙正六位上。

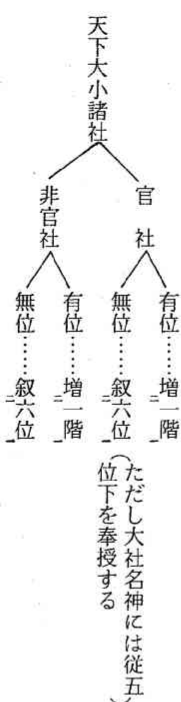
嘉祥四年正月廿七日

傍線を引いた部分が嘉祥三年の太政官符の内容であり、嘉祥四年のはそれを若干補正したものである。一方、『文徳実録』では嘉祥四年
仁寿元年正月庚子条に、

詔。天下諸神。不論有位無位。叙正六位上。

と簡略に記されており、意味するところは明確でない。嘉祥三年の太政官符を要約すれば、およそ次のような概念図ができあがる。

（第二図）



この官符から、官社・非官社を問わず神階上は区別がなかったことが察せられ、当然これからは官社化と神階との間には何ら必然的な因

果関係はなかった、という結論が導き出される。そればかりか、大社名神の中にも無位の神があり、嘉祥三年以前は神階上、一般の神と区別されなかったことを窺わせる。⁶⁹ 先掲の第二表と第三表にみられる名神化の時期と一挙三階加進の時期が嘉祥三年を挟んで二十数年隔たっている理由は以上の点より説明可能であろう。名神上の神階上の優遇は、この官符の「唯大社并名神雖云無位。奉授從五位下」の語句に端的に表現されていると考えるが、一般の官社と非官社との間では特別な配慮はなされず、同列に扱われていたことが知られる。

そこで次に、この官符をめぐるの相対立する見解を示し、更に詳細にこれらを検討してみることとする。若干長くなるが、論点を明確に把握する必要上、引用させて頂く。まず、(A)説を主張されていた宮城栄昌氏は「神名帳の成立」において次のように述べられている。⁶⁰

延喜神名帳社にして嘉祥四年以後從五位下に、あるいは六位以下から直ちに從五位下以上に叙された神は、叙位と同時にその前後に官社になったことがわかる。(中略)要するに嘉祥四年の太政官符は、官社は從五位下以上に、從つて以後の神社が官社となる時は少くとも從五位下以上に、非官社は正六位上に叙するように施行され、これによって、官社と非官社との位階上の權威が保持されたとみられる。私がこの両年の官符を以て官社成立の手懸りとするのはこの点によってである。

宮城氏の見解(1)・(2)に対し鋭い批判を加えられたのが西山徳、林陸朗両氏である。西山氏は「預官社と叙位との関係を示す表」を作製さ

れ、その結果、宮城氏の「説は成り立たず、むしろ、国史の記事は官社や非官社の別なく、従五位下以上の叙位を賜うことが一般的傾向をなしている」と考えられた。^⑧同じく林氏は「官社制度と神階」の論考の中で「嘉祥四年以後にあっても、宮城氏の如く、従五位下と正六位上との間に一線を劃し官社・非官社がこれに対応すると解釈することはできない」と述べられ、その例証として、嘉祥四年以後無位又は正六位上で官社に列した例もかなりあること、また延喜非官社で神階に預かっている例が非常に多いことの二点を挙げて神階は官社の要件ではない、とされている。^⑨

更に宮城氏はその後、西山氏に対して再批判をされ、嘉祥四年以後、預官社時あるいはそれ以後も従五位下に叙されなかった神は異例に属するものとし、依然として「延喜式所載の官社が嘉祥四年以後に少くとも従五位下に叙された直前直後を以て、その社が官社に預かった時期とみ」られている。また、「嘉祥四年の官符は、非官社はすべて正六位上に釘づけようとするものではなく、正六位上を非官社の最低位階とするとの趣旨である」から、非官社で従五位下以上の神階を持っても当然のことと言え、官社成立のこととは別個の問題であると述べられている。^⑩

さてそこで、前掲「神名帳の成立」よりの引用文を仮りに宮城説(1) (3)と名付け、逐一検討してゆきたい。

まず、従五位下に叙せられた神の座数を年次順に調べてみると、貞観年間には格段多くなっていることがわかるが、その傾向の端緒は嘉

〈第四表〉

年	座数	年	座数	年	座数	年	座数
天平勝宝元 (749)	0	大同元 (806)	0	承和12 (845)	7	天安元 (857)	5
天平神護2 (766)	2	天長10 (833)	0	" 13	3	" 2	3
宝亀5 (774)	1	承和2 (835)	2	" 14	4	貞観元 (859)	32
" 8 (777)	0	" 3	5	嘉祥元 (848)	5	" 2	13
" 11 (780)	3	" 4	10	" 2	10	" 3	16
延暦元 (782)	1	" 5	2	" 3	18	" 4	13
" 2	1	" 6	5	仁寿元 (851)	27	" 5	26
" 3	3	" 7	9	" 2	10	" 6	14
" 5	0	" 8	6	" 3	0	" 7	20
" 10	4	" 9	9	斉衡元 (854)	2	" 8	16
" 15	1	" 10	9	" 2	3	" 9	18
" 24	1	" 11	3	" 3	5	" 10	11

祥三年(八五〇) か仁寿元年(八五二) あたりに求められそうである(第四表)。嘉祥三年太政官符の実施の痕跡をとどめていると言えようが、官符以後に官社化された神の叙位の実状を別表より探り当ててみると、次のような結果にまとめられる。名神に預かった例も、官社化はそれ以前と考える方が自然であろうが、弘仁二年(八二二)安芸国速谷神・伊都岐嶋神を「名神例兼四時幣」に預からせた例もあるので、一応官社化と同次元にここでは扱っておく。別表から、預官社時の位階やあるいはそれ以後の昇叙の判り得るものについてまとめると、^⑪

(I) 預官社時に従五位下以上と考えられるもの——三十七座

(II) 従五位下以下のものの内、一年以内に従五位下に叙せられるもの

——十一座

(III) 預官社時の位階は不明だが、一年以内に従五位下になるもの——

嘉祥三年太政官符以後、官社には従五位下以上に叙するように施行された、という(2)の前半部分に關しては、氏の見解の妥当であることを先程確かめ得た。ところが、後半部分の「非官社は正六位上に叙するように施行され」たという見解に対してはまだ検討の余地は残されているよう。果して、嘉祥三年以後、太政官符通りに無位の神(官社・非官社の両方共)には最低階、正六位上を授けたと断定してよいのだろうか。宮城説(2)によれば、正六位上という神階は非官社に限定されているように受け取れるが、実際上は官符通りに整然と神階を与えたものではなかったらしい。

試みに『文徳実録』における神階記事の表記の仕方に注目してみると、意外な事柄が判明する。即ち、仁寿元年(八五二)から齊衡三年(八五六)に至るまでの間(巻三、巻八)、従五位下に叙す場合は例外なく「授」の字を使用しているのに対し、それより高い神階に叙す場合は大概において「加」の字を使用している。嘉祥三年(巻一)巻二)段階では神階の区別なく、「授」「加」の両字の混用が見られ、また天安元年(八五七)と二年(巻九、巻十)に至ると、神階の全てが「授」と記されており、「加」の表現は全く姿を消している。巻二との執筆者の配慮の違いを反映していると思われるが、仁寿元年から齊衡三年までの規則性を持った記述型式に宮城説(2)への反論の証左を認められるのではないだろうか。

つまり推測するところではこうである。従五位下を以って「授」「加」の区別がなされ、決して「加従五位下」と記述されなかった訳は、そ

の神がもとより正六位上やあるいはそれ以下というのではなくて、全く新たに、即ち無位から直ちに従五位下を奉授されたものだったからと考えられはしないだろうか。

右のように考えた場合、第五表中の従五位下を奉授された非官社九例は無位から直ちに従五位下を授けられた神と見做すことができ、宮城説(2)の後半部分は修正せざるを得なくなってくる。

嘉祥三年(八五〇)太政官符以後、大概の傾向として、官社には従五位下以上の神階を与えたであろう。が、しかし非官社だからといって、最低階正六位上に甘んじていたわけではなく、また中央の神祇官においても、非官社に正六位上を叙するような政策をとったわけでもなかった。次の第六表は、官符以後に無位の神の奉授された神階を調べた

＜第六表＞ 嘉祥三年太政官符以後、無位の神が奉授された神階

年月日	国	神	神階	延喜式
貞觀元・3・20	宮中	大湯坐志府	從五位下	小一
7・11	出雲	雲泉内濃	正五位下	小一
8・13	和河	信濃	正五位下	大・月次新嘗
12・14	信濃	信濃	正四位下	一一
2・2・5	信濃	信濃	從五位下	一一
660	信濃	信濃	從五位下	一一
3・5・朔	宮中	中雲	從五位下	小一
10・22	大宮	中雲	從五位下	小一
4・4・24	大宮	中雲	從五位下	小一
662	河内	中雲	從五位下	小一
4・26	河内	中雲	從五位下	小一
7・正・18	近江	中雲	從四位下	一一
3・21	宮中	中雲	從三位	一一
4・25	大宮	中雲	從五位下	一一
6・8	因幡	中雲	從五位下	小一
8・6・朔	信濃	中雲	從五位下	小一
666	信濃	中雲	從二位	一一
7・13	播磨	中雲	從四位下	一一
10・8	因幡	中雲	從五位下	小一
10・24	因幡	中雲	從五位下	一一
10・9・17	甲斐	中雲	從五位下	一一
12・21	關西	中雲	從五位下	一一
11・3・22	豐後	中雲	從五位下	大一一
15・4・5	豐伯	中雲	從五位下	一一
元慶2・2・27	大備	中雲	從五位下	一一
12・15	備中	中雲	從五位下	一一
3・2・4	宮中	中雲	從五位下	一一

ものである。三十神の内、非官社は十九神で、それらはいいてい無位から一挙に従五位下を授けられている(十四神)。国史には正六位上以下の奉授に関しては記載されなかったもので、取り上げられた記事でのみ断定するのは危険であるが、第六表の例証より考えれば少なくとも宮城説(2)のように「非官社は正六位上に叙するよう施行され」たとは言えないであろう。

別表を概観すると、時代の下るにつれて官社化された時点で既に従五位下以上の神階を有する神の多くなることが傾向としてつかめるが、これは従五位下以上の神階を持つことが即ち官社化へのパスポートと理解さるべきではなく、むしろ神階濫授の風潮の中にあつて神階は一般化しており、大勢の中の極く一部が尚、官社化を求めて止まなかった状況をそこに見出すべきであろう。

『三代実録』元慶元年(八七七) 九月廿五日癸亥条には、

分遣中臣齋部尚氏人於五畿七道諸国。班幣境内天神地祇三千一百

卅四神。縁供奉大嘗会也。

と、『延喜式』段階の式内社(官社)とは数の上で異動が見られるものの、^⑧ほぼ元慶元年までで一応の官社化は終焉を迎えたと予想される記載があり、とすれば、別表①②の神はおよそ三千神の官社が揃った上での官社化ということになろう。第五表と第六表で見た如く、非官社にして従五位下以上の神階を持つ神があつても一向に差支えはなかつた。それらの極く一部が官社化終焉期に、既に一般的な存在であつた神階を持って官社に列せられたのであり、また正六位上以下の

神階で官社となつた神はだいたい一年以内には従五位下に昇叙させられたものと考えられる。

では何故、一年以内という短期日に従五位下に昇叙せねばならなかつたか。先程、第六表で見たように、官社のみならず非官社にも無位から一挙に従五位下を奉授し、決して非官社だからといって正六位上を与えていたわけではなかつた。ここで改めて問題となるのが宮城説(3)の「官社と非官社との位階上の權威の保持」という点であろう。神祇官統制の手段となる班幣は放棄されるという状態ではあつたが、尚官社の国家的權威という点は捨て難かつた。非官社ですら従五位下を持ち得るならば、官社がそれより一階下の正六位上にとどまる必要はなかつたのである。それが一年以内の従五位下昇叙という現象となつて具体化したと考える。しかし非官社ですら従五位下以上の神階を与えねばならなかつた点にこそ、実際の政治社会の上での「官」の後退化、逆に言えば左地側の中央支配からの自立が認められるのではなからうか。

官社・非官社いずれも神階においては差別されないとすると、官社であつても特殊な官社へ、即ち名神化へ転身を図ろうとする動向が生じるのも強ち無理はなかつた。九世紀に入つて預名神記事の増加することが、それを示唆していよう。次節では宮城説(3)の検討を兼ね、名神化と神階との関係に焦点を絞つて考察を進めたい。

第二節 名神化と神階の相關關係

『日本後紀』弘仁二年（八一）七月己酉条には、安芸国速谷神・伊都岐嶋神を名神例兼四時幣に預からせた記事があり、名神化事例の初見と考えられる。それ以前の段階で既に「名神」という特殊な官社が成立していたことを窺わせるが、概略ながら次に名神制度の起源に言及してみよう。『続日本紀』には以下のような名神関連記事を載せている。

- (1) 遣使奉渤海信物於諸国名神社。（天平二・十・庚戌）
- (2) 遣使奉幣於近江国名神社。（天平宝字八・十一・癸丑）
- (3) 詔羣臣曰。宜差使祈雨於伊勢神宮及七道名神。是夕大雨。（延暦七・五・己酉）
- (4) 詔奉幣畿内名神。以祈嘉澍焉。（延暦九・五・甲午）
- (5) 以炎旱經旬。奉幣畿内諸名神。（延暦十・七・庚申朔）

(1)が名神の初出であるが、制度上の名神とみるより、官社の中の特
に有力な神と解釈した方がよいであろう。(2)は仲麻呂の乱に際しての
奉幣であるが、『延喜式』では近江国の名神大社は全部で十三神で、
その内仁寿元年（八五）散久難度神が名神化されたのと、貞観二年
（八六〇）建部神が官社化された（別表）のを除くと、天平宝字八
年（七六四）当時の名神はおそらく十神に満たなかったと推測される。
数の問題はさておくとしても、これも制度上の名神とみるよりも、む
しろ近江国内の有力神への奉幣と解した方がよいであろう。^⑦

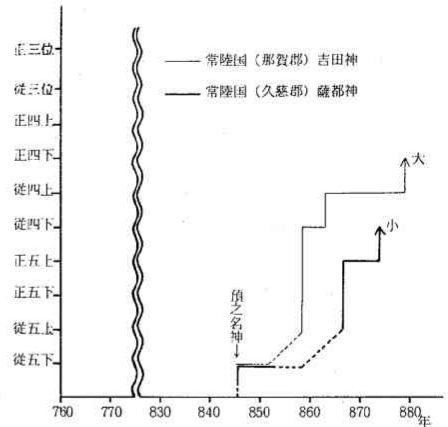
第一章で、大宝令直後成立した全国普遍的な官社制度において、官
社数の飛躍的な増加を迎えるのが天平期であり、官社の実質の形骸化
の始まるのが宝龜年間であると述べた。また、第一表の神階奉授の例
をみると、延暦年間に入って神階は漸く普遍化の径路を歩み始めた
らしいことが読み取れる。神階そのものも従二位などの高い位階の出現
をみていることから、多数の官社の中でも一種特殊な官社としてこれ
らは存在したと考えられよう。以上の点から、官社制度の再編成の時
点を私は延暦年間に求めたい。前掲(3)・(5)の延暦年間の名神事例は同
一次元の官社機構の中から新たな制度として、名神制度が発足した後
のものと推測する。

第二表・第三表では名神化による一挙三階加進という現象が嘉祥三
年太政官符以後に見られたが、ここから名神と一般の官社（『延喜式』
では名神大と名神小に対応する）との間には神階による格差が現前と存
在していたことが予想できる。この予想を基に、比較的昇叙の形跡の
多く残る名神大と名神小の神を例にとり、神階による格差を検討して
みたい。

まず第一に、承和十三年（八四六）に従五位下に叙せられた常陸国
薩都神と、同年名神化された常陸国吉田神を選んでみた。^⑧

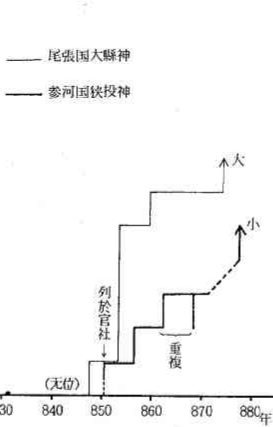
承和十三年の時点では両神とも従五位下であったが、吉田神が名神
に預かることによって嘉祥三年（八五〇）以後、もう片方の薩都神とは
神階上、格段の差がついてきていることがわかる。

次にもう一組、仁寿元年（八五）に従五位下に叙せられた参河国狭



＜第七表＞

⑦ 投神と同年官社化された尾張国大縣神^⑧（官社化と同時に、そのすぐ後に名神化されたのであろう）を例にとってみる。



＜第八表＞

⑧ 第八表によって明らかに、両神は仁寿元年には同じ從五位下でありながら、片方の大縣神は官社に列られる（名神化もほぼ同時期と推測することによって、仁寿三年（八五五）には一挙に從四位下に昇叙され、四階も位階が上げられている。

以上の名神・吉田神と大縣神は嘉祥三年を挟んで前後に名神となっており、飛躍的な神階の加進現象が見られるのはどちらも嘉祥三年以後であり、第二表と第三表の大山積神・野間神においても同じことが言える。官符の内容は嘉祥三年以前においては無位の大社名神の存在すら推測せしめるものであり、また第五表・第六表では非官社にして從

五位下以上の神階を持つ神の存在も確認できた。とすると、嘉祥三年以前、神階は全く官社制度には関わりなく別個の政策として施行されており、官社制度が二次的に産み出した名神制度にすら、何ら影響を及ぼしていなかったということになる。

⑨ 嘉祥三年の太政官符以後、全国の無位の神の悉くが即座に正六位以上の神階を与えられたのではなかった。第六表で見た如く二十数年経過したのちでもまだ無位に放置されたままの神もあったし、また官符通りに無位の神には正六位上を与えていたわけではなく、突如非官社に從三位を与えるなどの異変も起きている。官符以後、官社に限らず非官社にすら高い神階を与えていたとなると、名神の存在意義は稀薄化してしまう。從五位下くらいの低い神階では尚更である。そこで、官社の中の名神に対して、一挙数階加進という措置をとったものと推測する。

宮城説⑩の「官社と非官社との位階上の権威の保持」という点についてはどうか。非官社に関しては史料の頻出度が低く、從四位下や從三位という高い神階を奉授した例がある傍ら、從五位下奉授の一回きりで姿を消してしまう神が少なくない。ただ概観した限りでは一般的な傾向として宮城説⑩は首肯されるべきものと思われるが、より厳密に言うならば、むしろ「嘉祥三年以後、名神と非官社、官社との間には位階上の権威の保持があった」と考える方が実態に近い。

神階の昇叙が多数行なわれる中、八世紀後半から始まった「頒幣之日祝部不参」という状態は延暦十七年（七九八）官幣社・国幣社に分

けてのちも改善されなかったらしい。弘仁八年（八一七）には諸社の祝が参会せず、そのため「幣帛一百卅二裘。収諸官庫。無人預付。」という有り様で、⁽⁷⁶⁾ 斉衡二年（八五五）には、「宜附貢調大帳等使送之」と官庫に積まれた幣帛を貢調使らに附して諸社へ運搬するよう対策が講じられている。⁽⁷⁷⁾ 次いで貞観十七年（八七五）には「畿内外国不受幣物同附件三箇使班送」と税帳・大帳・朝集使らに託して祈年・月次・新嘗祭の幣帛を諸社に班下しようとしている。⁽⁷⁸⁾

祝部不参に對し、「若不悛者宜早解替者」（宝龜六年）と厳しい処罰規定がなされ、⁽⁷⁹⁾ 後に若干の変更はあったものの、⁽⁸⁰⁾ 先述の貞観十七年の太政官符でも「但頒幣帛之日不参祝部者。須依格先科极令償將來。若猶不悛。將從解却。」と先に科を科した上で改まらなかつたら解却に従うこととなっている。厳しい処罰規定にも拘らず、その後も「雇出身代不自参進」と、⁽⁸¹⁾ あたかも太政官符を無視したような挙措に出る祝部たちであった。彼らは、神祇官による祭祀統制という属性を無視しながら、専ら神階の上昇あるいは官社に組み入れられんことを要求するだけであった。官社の実質が失われてゆく中、非官社にして神階を奉授する例が次第に増えてゆくのも無理はなかったと思われる。嘉祥三年太政官符以後の名神における神階優遇策は、本来の班幣の体裁を整えようと苦心する中央の政策路線と合致するものであり、これによって一般の官社や非官社の神階昇叙の要求にある程度とどめを刺したと推測する。

おわりに

神階と官社化との間には必然的な相関関係はなかった。しかし翻って言えば、少なくとも嘉祥三年以後、官社にとって従五位下以上の神階は必要とされたのである。だが従五位下という神階を奉授された神を溯れば、必ず官社に帰着するわけではなかった。この意味で神階は官社化の指標となり得るものではなかったのである。

最後に本稿では論及できなかった問題を二、三挙げ、今後の課題としたい。まず、第二章において、嘉祥三年太政官符にある「大社并名神」の語句から容易に観取できるように両者の間の区別は厳然としていたと思われたが、名神と大社との関係を不分明なまま取り扱い曖昧さを残した。同様に「名神と非官社との位階上の權威の保持」を想定した場合、神階の上下は全国の神社を合わせた上での絶対的なものではなく、一国内か、もっと小単位の一郡内での相対的な上下関係を反映していたと考える。史料の頻出度による制約もあり、追究することは困難であるが、できれば少なくとも一国内の名神・一般官社・非官社の神階状況を捕えることが必要であろう。

また九世紀中葉から神階奉授の事例が一段と増え、嘉祥三年と四年の両官符が打ち出された背景を「文徳天皇の御身につながる御信仰が主となり、神階の昇叙を希望する時代思潮が誘因となって両官符を出させたまうことになった」⁽⁸²⁾ と表面的理解からのみ説明し得るのかどうかも甚だ疑問である。従来、神階のメリットは経済的よりも優れて名譽

的なものと説かれてきたが、単にそれだけに終わらず、「在地の実態からすれば、むしろ、現実的な社会の矛盾が露呈して来る程に採用された、多分に形式的・皮相的な手段に過ぎない」ものであり、「律令国家解体過程の一現象」ととらえる視点の必要性も感じるのである。⁽⁸³⁾「神階の昇叙を希望する時代思潮」の側面の存在したことも強ち否定はできないが、一方で律令制の動揺とともに地方神の神威の後退という現象が進行しており、「神々の権威も公民層の分解と窮迫の前には、何らの救いになりえなかった」という指摘に充分耳を傾けるべきであろう。にも拘らず、神階昇叙や官社化だけを要求してくるところに中央の神社行政の消極性ないしは「古代天皇による人民支配のための一機構」⁽⁸⁵⁾としての神祇官制の弱体化が見られるのである。

同じくその延長線上に展開してくるのが各国の一の宮制であろう。⁽⁸⁶⁾

一の宮の多くは『延喜式』の名神大社に相当しているが必ずしも大社が一の宮に選ばれたわけでもなく、中には式外社も含まれるなど、国家側がとらえた神社序列は中世に到って霧散したと言ってよい。例えば比較的遅く官社に入った近江国建部神（貞観二年）などは、それ以前に名神に列せられた同じ栗太郡の散久難度神（仁寿元年）を抜きん出て一の宮に選ばれており、そこには国を中心とした新しい神社への視方が生じていたことを窺わせる。

論じ尽くせなかった部分も多いが、今後の課題に残しひとまず擱筆することとする。

（一九八四年九月改稿）

補注

- ① 例えば、岡田精司「古代国家と宗教」（『講座日本史』一、東大出版会、一九七〇年）上田正昭「神階奉授の背景」（『日本古代の国家と宗教』上、吉川弘文館、一九八一年）
- ② 湯浅泰雄『古代人の精神世界』（ミネルヴァ書房、一九八〇年、二二六頁）高取正男「神道の成立」（平凡社、一九七九年）
- ③ 湯浅泰雄、前掲書二二頁
- ④ 林陸朗「官社制度と神階」（『国学院雑誌』54—2）
- ⑤ 別表参照
- ⑥ 蘭田香融「神祇令の祭祀」（『関西大学文学論集』3—4）早川庄八「律令制と天皇」（『史学雑誌』85—3）
- ⑦ 早川庄八、前掲論文⑥
- ⑧ 『群書類従』五、三三四頁
- ⑨ 『政治要略』廿五にも「右官史記云、太上天皇持統元年正月、頒曆諸司」と出ており、右官は右弁官の前身官司で、右官史記とはその史の記録かと推測されている。（原秀三郎「静岡県城山遺跡出土の具注曆木簡について」『木簡研究』三）同様に天武朝にも官史記が存在したと思われる。尚、祈年祭については、大西源一「祈年祭について」（『神道研究』二—二）西山徳「祈年祭の研究」（『神社と祭祀』至文堂、一九六五年、のち『増補上代神道史の研究』国書刊行会、一九八三年）岡田精司「律令的祭祀形態の成立」（『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九七〇年）に多く依拠している。

- ⑩ 渡辺晋司「大幣と官社制度」(『神道及び神道史』31・32) 阿部武彦「古代に於ける官社制の成立とその問題点」(『東海史学』10) 高嶋弘志「律令新国造についての一試論」(『日本古代史論考』吉川弘文館、一九八〇年)

- ⑪ 「延喜式」一、四時祭上、太政官式

- ⑫ 「続日本紀」慶雲三年二月庚子条

- ⑬ 渡辺晋司、前掲論文⑩

- ⑭ 「群書類従」十六、十頁

- ⑮ 「古語拾遺」は、斎部氏が自己の立場を強調した氏族伝承で、その記述に関しては懐疑的な態度がとられている。「古語拾遺、高橋氏文」(『新撰日本古典文庫』四、現代思潮社、一九七六年)では「記文」を大宝律令と解釈している。

- ⑯ 「続日本紀」大宝元年十一月丙子条と大宝二年二月庚戌条に見える「大幣司」「班大幣」の語も大宝令直後における祈年祭執行を示すものと考えられており(田中卓「造大幣司」「続日本紀研究」一一二など)、(ロ)の記事と関連していることは間違いない。

- ⑰ 岡田精司、前掲論文⑨、西宮秀紀「神祇官成立の一側面―祝・祝部を中心に―」(『続日本紀研究』197)「律令神祇官制の成立について―その構造・機能を中心として―」(『ヒストリア』93)において、「神祇官」の名称だけの問題にとどまらず、構造・機能の面からも令制神祇官の成立は淨御原令においてであったと考えられている。

- ⑱ 官社制度と神階について管見に及んだのは、宮城栄昌「神名帳の成立」

- (「延喜式の研究」論述篇、大修館、一九五七年) 西山徳「官社制度における神の位階」(「神社と祭祀」のち「増補上代神道史の研究」) 林陸朗、前掲論文④、米沢康「神階奉授と彫幣の民」(「古代文化」25―1) 上田正昭、前掲論文③などであり、また主題からは若干外れるが、多く教示を得た研究論文を次に掲げておく。宮地直一「諸神同時昇叙の研究」(「史学雑誌」32―9と11) 河野省三「諸神同時の昇叙について」(「皇国」313) 渡辺晋司、前掲論文⑩、阿部武彦、前掲論文⑩、梅田義彦「官社考」(「神道の思想」二、雄山閣、一九七四年) 西山徳「預官社考」(「神社と祭祀」のち「増補上代神道史の研究」)

- ⑲ 宮城栄昌、前掲論文⑱

- ⑳ 西山徳、前掲論文⑱、林陸朗、前掲論文④

- ㉑ 「日本文徳天皇実録」嘉祥三年七月丙戌条

- ㉒ 「日本文徳天皇実録」貞観元年正月廿七日甲申条

- ㉓ 西山徳「預官社考」(前掲⑱)に詳細な論述がある。

- ㉔ 「新抄格勅符抄」大同元年牒には「氣比神二百卅四戸越前国、天平三年十二月十日符従三位料二百戸」とある。

- ㉕ 「東大寺要録」国書刊行会、一一八頁

- ㉖ 梅田義彦氏は「官社考」において三品の誤記と考えられているが、二宮正彦氏「諸神への品位奉授について」(「日本上古史研究」54)、林陸朗氏「官社制度と神階」、上田正昭氏「神階昇叙の背景」はいずれも「東大寺要録」の神階記事に懐疑的な立場をとっておられる。

- ㉗ 上田正昭、前掲論文①

②8 詳しくは田村圓澄「神宮寺と神前読経と物の怪」(『飛鳥仏教史研究』塙書房、一九六九年)を参照されたい。同氏作成の表によれば、靈龜年中(七一五〜七二六)に保食神を氣比神宮寺に祭ったことを初め、奈良時代には十三件見えている

②9 『日本三代実録』貞觀元年正月廿七日甲申条

『続日本後紀』承和二年二月戊戌条に「正三位勲一等」とあり、同六年十二月丁巳条には從二位、『日本文徳天皇実録』嘉祥三年十月辛亥条には正二位に昇叙されている。

③0 上田正昭、前掲論文①

③1 『続日本後紀』承和六年八月己巳条

③2 代表的な研究として、中野幡能「八幡信仰史の研究」上・下(吉川弘文館、一九七五年)

③3 二宮正彦、前掲論文②6

③4 『日本文徳天皇実録』仁寿二年二月丁巳条には四品を授け、『日本三代実録』貞觀元年正月廿七日甲申条では二品へ昇叙されている。

③5 『日本三代実録』貞觀元年正月廿七日甲申条で、無品勲一等から一品へ昇叙されている。

③6 『日本三代実録』貞觀八年閏三月七日壬子条、同十二年八月廿八日戊申条、同十七年三月廿九日壬子条

③7 『続日本後紀』承和四年八月戊戌条で名神に預かったあと、『日本三代実録』貞觀二年閏十月十六日壬戌条、同八年閏三月七日壬子条、同十二年八月廿八日戊申条、同十七年三月廿九日壬子条に神階記事がある。

③8 『日本三代実録』貞觀四年九月十八日甲申条、同八年閏三月七日壬子条、同十二年八月廿八日戊申条

③9 『続日本後紀』承和四年八月戊戌条で名神に預かったあと、『日本三代実録』貞觀三年五月廿一日甲午条、同八年閏三月七日壬子条、同十二年八月廿八日戊申条、元慶五年十二月廿八日壬寅条

④0 渡辺直彦「神階勲位の研究」(『日本古代官位制度の基礎的研究』吉川弘文館、一九七二年)

④1 『続日本紀』天平宝字二年九月丁丑条はか神護景雲元年四月庚子条、宝龜四年六月丙午条

④2 『続日本紀』延暦七年三月辛亥条

④3 『続日本後紀』天長十年四月丁丑条

④4 『日本三代実録』貞觀八年正月廿日丁酉条

④5 『日本三代実録』元慶六年十二月九日丁未条

④6 上田正昭、前掲論文①

④7 今木神が貞觀元年正月廿七日甲申には正二位が奉授されているのに対し、久度神・古閑神は同日に從四位下から從四位上に昇叙され、漸く貞觀五年五月二日甲子に正三位となるだけである。また合殿比咩神は更に神階が下で貞觀五年五月二日甲子にはまだ從四位下から從四位上へ昇叙されただけであった。

④8 義江明子「平野社の成立と変質」(『日本歴史』429)

④9 多度神は延暦元年十月庚戌朔に從五位下を奉授されてのち、一階ずつ承和十一年六月丙辰に到るまで順当に昇叙されている。嘉祥三年九月甲申

に官社に列する以前、承和六年には天台別院となり（翌年停止）、嘉祥二年には真言別院となっている。

⑤0 『平安遺文』二十

⑤1 『続日本紀』天平九年五月壬辰条

⑤2 『続日本紀』天平九年八月甲寅条

⑤3 関和彦「古代神祇信仰の国家的編成」（『民衆史研究』10）吉井良隆

「出雲国風土記と国造」（『出雲国風土記の研究』出雲大社御遷宮奉賛会、一九五三年）門脇禎二「出雲の古代史」（NHKブックス、一九七六年）

⑤4 関和彦、前掲論文⑤3

⑤5 神階の初見を本稿では天平三年越前国氣比神としたが、『日本書紀』天武元年七月壬子条の「即勅登進三神之品以祠焉」を以って七世紀既に神階があったとする説も存在する（『日本古典文学大系・日本書紀』岩波書店、一九六五年、四〇五頁）。三神とは大和高市御県坐鴨事代主神社、牟狹坐神社、村屋坐弥富都比売神社であるが、牟狹坐神及び村屋坐弥富都比売神は貞觀元年正月に従五位下から従五位上に昇叙されており、従五位下となる以前は無位であった可能性が大きいので（第二章）、「品」を神階と解する必要はなく、むしろ官社化の一表現ととらえた方がよいと思われる。

⑤6 『類聚三代格』一、神社事

⑤7 野村忠夫「献物叙位をめぐる若干の問題」（『日本古代の社会と経済』下、吉川弘文館、一九七八年）

⑤8 『類聚三代格』卷一、神叙位并託宣事

⑤9 名神については梅田義彦「名神考」（『神祇制度史の基礎的研究』雄山閣、一九六四年）熊谷保孝「律令時代の名神」（『政治経済史学』166）に詳しい。大社の概念については利光三津夫「律令にいう『大社』の意義と『大社』破壊の罪の性格」（『史学雑誌』73-7）に直木・瀧川論争の経過がまとめられている。尚、本稿では「大社」と「名神」の語の概念に論及できなかった。

⑥0 宮城栄昌、前掲論文⑩、四八六-四八七頁、⑩は「神名式の成立」（『横浜国立大学人文紀要第一類』一九五三年）をもとに修正加筆されたものである。

⑥1 西山徳、前掲論文⑩

⑥2 林陸朗、前掲論文④、林陸朗氏の論拠二点は、西山徳氏も同様に宮城栄昌氏への疑点の根拠とされている。

⑥3 宮城栄昌、前掲論文⑩、四九二-四九五頁、「延喜式の研究」に収録する際に、西山氏の反論に応じて、補注の中で再批判されている。

⑥4 第一表から嘉祥三年十二月廿八日以降に官社化された神を取り上げて、分類する。

(I)に該当するもの：3 4 6 8 13 19 22 23 31 32 35 37 38 40 41 42 43 48 49 50 51 53 57 58 59 63 64 65 66 67 68 69 70 72 79 80 82の合計37座

(II)に該当するもの：26 27 28 29 30 45 47 52 60 61 62の合計11座

(III)に該当するもの：14 16 25 46の合計4座

(IV)に該当するもの：36 54の合計2座

仁寿三年の「從四位下を授く」の表記だけが例外となっている。

- 69 『日本三代実録』元慶元年八月廿五日癸巳条に「分遣大中臣氏人於五畿七道諸國。秋除境内穢惡。為供奉大嘗會也。」とあり、九月廿五日の班幣の前に五畿七道諸國の諸社の穢れを祓い除くことが行なわれている。

「三千一百卅四神」とは即ち、祈年祭に預かる官社数を示したものと考えるが、『延喜式』の三・三二座よりも二座多いことになる。一旦官社となりながら、その後除籍された官社があったのであろうか。

- 70 熊谷保孝氏は前掲論文⁶⁹において名神制度の成立時期を天平期に近い時期とされているが、名神への奉幣の多くは祈雨・止雨・疫病防止等を目的としたもので、それに効験を現わすのが名神の機能として期待され、同時にその点に存在意義があったとすれば、天平二年と天平宝字八年の記事は以上の目的からは外れており、むしろ「名神」の語は神に対する尊称と理解した方がよいと考える。尚、以上は宮城栄昌氏「神名帳の成立」参照

- 71 『続日本後紀』承和十三年九月丙午条

『日本三代実録』貞観八年五月廿七日庚午条、同十六年十二月廿九日癸未条

- 72 『続日本後紀』承和十三年四月丁亥条

『日本文德天皇実録』天安元年五月壬戌条

『日本三代実録』貞観五年八月二日壬戌条、元慶二年八月八日辛未条

- 73 『日本文德天皇実録』仁寿元年十月乙巳条

『日本三代実録』貞観六年二月十九日丙子条、同十二月八月廿八日戊申

条（同十八年六月八日癸丑条と重複）、元慶元年閏二月廿六日戊戌条

- 74 『続日本後紀』承和十四年十一月癸酉条

『日本文德天皇実録』仁寿元年十一月辛巳条、同三年五月辛亥条

『日本三代実録』貞観元年二月十七日癸卯条、同十五年八月十三日乙巳条

- 75 例えば、天長十年七月戊子に名神に預かった伊夜比古神はその十年後の承和九年十月壬戌まで無位であったことが確かめられる。（同日に従五位下となる）また、承和二年九月辛未に名神となった伊賀保社も四年後の承和六年六月甲申まで無位（同日に従五位下となる）であった。ということは、嘉祥三年以前、名神ですら無位のまま放置されており、名神に預かることと神階とは別の次元の問題であったことになる。

- 76 『類聚国史』十、祈年祭、弘仁八年二月丙申条

- 77 『類聚三代格』一、祭并幣事、斉衡二年五月廿一日太政官符

- 78 『類聚三代格』一、祭并幣事、貞観十七年三月廿八日太政官符

- 79 『類聚三代格』一、科板事、貞観十年六月廿八日太政官符

80 宝龜六年には不参の祝に対して、解替し有位無位に拘らず一切本に還すという規定であったが、貞観十年には宝龜六年の処罰規定が厳しすぎるとして、上級を科してその上でまだ改めなかった場合解却する、と緩和されている。ところが更に貞観十七年にも依然祝は出頭せず、再び貞観十年と同じ規定にされている。

- 81 『類聚三代格』一、祭并幣事、寛平五年三月二日太政官符

- 82 西山徳、前掲論文¹⁸

⑧ 米沢康、前掲論文⑧

⑨ 岡田精司、前掲論文①、二八〇頁

⑩ 西宮秀紀、前掲論文⑩

⑪ 原田敏明『神社』（至文堂、一九六六年）第六章に詳しく述べられている。

（附記）

本稿は一九八二年一月に提出した卒業論文をもとに、その後の研究に教え導かれながら修正・補訂を加えたものである。改稿の際、西宮秀紀氏や奈良女大生諸姉に多大な御教示を頂いた。ここに厚く御礼申し上げたい。また、礼を逸し誤解に基づく議論があれば、識者の叱正をお願いしたい。

別表 国史に見える官社化記事

国史	年月日	神名	事項	理由	従五位下奉授時期	延喜式
文武	(七〇二) 大宝2・7・癸酉 (七〇六) 慶雲3・2・庚子 (七二七) 天平9・8・甲寅	山城国乙訓郡火雷神 甲斐信濃越中但馬土佐等一十九社 其在諸国能起風雨為國家有驗神未預幣帛者	入大幣及月次幣例 入祈年幣帛例 悉入供幣之例	每旱祈雨、頗有徵驗 (其神名具神祇官記)	(八五〇) 嘉祥3・7・丙戌	名神大。月次新嘗。
聖武	(七七二) 光仁 宝龜3・8・甲寅	(伊勢國) 荒御玉命 " 伊佐奈伎命 " 伊佐奈美命	入於官社	去神護中、大隅國海中 有神造嶋 己等為賊被國、兵...		並大。月次新嘗。
桓武	(七七八) 宝龜9・12・甲申 (七八〇) 宝龜11・12・甲午 (七八三) 延暦2・12・丁巳	大隅國大穴持神 越前國丹生郡小虫神 (陸奥國) 桃生白河等郡神一十一社 大和國平群郡久度神	為官社 為幣社 預幣社 ↓從五下為官社			小。

国史	年月日	神名	事項	理由	從五位下奉授時期	延喜式
日本後紀	延曆9・11・丁亥 (七九〇)	陸奥国黒川郡石神山精社	為官社			小。
日本後紀	延曆15・8・甲戌 (七九六)	上野国山田郡賀茂神	為官社			小。
日本後紀	" " 美和神	" " 郡波郡火雷神	為官社			小。
日本後紀	延曆18・5・丙辰 (七九九)	隱岐国智夫郡比奈麻治比売神	預幣例	常有靈驗	承和5・10・甲午 (八三八)	小。
日本後紀	延曆24・12・乙卯 (八〇五)	甲斐国巨麻郡弓削社	預官社	以有靈驗也		小。
平城	大同元・4・己未 (八〇六)	大和国葛上郡高天彦神 ①	預四時幣帛例	縁古野皇太后願也		名神大。月次新嘗
嵯峨	弘仁2・7・己酉 (八一二)	安芸国佐伯郡速谷神	預名神例兼四時幣			名神大。月次新嘗。
	" " 伊都岐嶋神					名神大。
(日本紀略)	弘仁7・7・乙酉 (八一六)	山城国紀伊郡飛鳥田神	預官社例			小。
	" " 眞幡寸神					小。
	弘仁9・5・辛卯 (八一八)	山城国愛宕郡貴布禰神	為大社		弘仁9・6・癸酉 (八一八)	名神大。月次新嘗。
	弘仁14・正・丁丑	常陸国筑波神	(從五下) 為官社	以靈驗頻著也		二座。一名神大。一
続日本後紀	天長10・7・戊子 (八三三)	越後国蒲原郡伊夜比古神	預之名神	以彼郡每有旱疾致雨 救病也	承和9・10・壬戌 (八四二)	名神大。
	承和2・9・辛未 (八三五)	上野国群馬郡伊賀保社	預之名神		承和6・6・甲申 (八三九)	名神大。

国	史	年	月	日	神	名	事	項	理	由	從五位下奉授時期	延	喜	式
		承和7・6・甲子	(八四〇)		播磨国揖保郡家嶋神		為官社					名神大。		
		承和7・7・庚子			赤穂郡八保神							小。		
		承和7・11・庚辰			肥後国玉名郡足野神		預官社					小。		
					対馬嶋和多郡美御子神							名神大。		
					波良波神		預官社					小。		
					都都知神							小。		
					銀山神							小。		
		承和8・2・己酉	(八四二)		備前国邑久郡安仁神		預名神					名神大。		
		承和8・8・辛丑			土左国美良布神							小。		
					石土神		預官社					小。		
		承和9・9・乙巳	(八四二)		隱岐国智夫郡由良比売命神							名神大。		
					海部郡宇受加命神		預官社					名神大。		
					穰地郡水若酢命神							名神大。		
		承和9・10・乙亥			但馬国気多郡山神							名神大。		
					雷神							名神大。		
					戸神		預官社					名神大。		
					蜀椒神							名神大。		
					城埼郡海神							名神大。		
		承和9・11・乙卯			讃岐国栗井神		預之名神					名神大。		

<p>(八四三) 承和10・4・己未朔</p>	<p>(山城国) 坐梅宮酒解神</p>	<p>(正五下) ↓ 從四下</p>	<p>(八三六) 承和3・11・壬申</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>承和10・4・己未朔</p>	<p>大若子神</p>	<p>(從五下) ↓ 從四下</p>	<p>承和3・11・壬申</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>承和10・4・己未朔</p>	<p>小若子神</p>	<p>(從五下) ↓ 從四下</p>	<p>承和3・11・壬申</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>承和10・4・己未朔</p>	<p>自玉手祭米酒解神</p>	<p>(從五下) ↓ 正五下</p>	<p>承和3・11・壬申</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>承和10・10・壬申</p>	<p>(山城国) 坐梅宮酒解子神</p>	<p>(從四下)</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>承和12・12・庚辰</p>	<p>平野社一前</p>	<p>預之名神</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>(八四五) 承和12・12・庚辰</p>	<p>(山城国) 稻荷神</p>	<p>(從四下) 預多神例</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>(八四六) 承和13・4・丁亥</p>	<p>常陸国郡賀郡吉田神</p>	<p>(從五下) 預之名神</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>	<p>名神大。月次新嘗。</p>
<p>(八四七) 承和14・7・丁卯</p>	<p>撰津国大依羅社</p>	<p>為官社</p>	<p>四座。並名神大。月次相嘗新嘗。</p>	<p>小。</p>
<p>肥後国阿蘇郡国造神社</p>	<p>因幡国法美郡宇倍神</p>	<p>預官社</p>	<p>以国府西有失火……靈驗明白也</p>	<p>名神大。</p>
<p>(八四八) 嘉祥元・7・甲申</p>	<p>隱岐国伊勢命神</p>	<p>預名神例</p>	<p>縁有靈驗也</p>	<p>名神大。</p>
<p>嘉祥元・11・壬申</p>	<p>常陸国久慈郡稻村神</p>	<p>預官社</p>	<p>縁有靈驗也</p>	<p>小。</p>
<p>(八四九) 嘉祥2・4・庚寅</p>	<p>美濃国池田郡養基神</p>	<p>預官社</p>	<p>縁有靈驗也</p>	<p>小。</p>
<p>嘉祥2・7・癸酉</p>	<p>武蔵国播磨郡奈良神 (嘉祥3・5・丙申)</p>	<p>預官社</p>	<p>縁有靈驗也</p>	<p>小。</p>
<p>嘉祥2・11・壬子</p>	<p>播磨国佐用郡佐用津姫神</p>	<p>預官社</p>	<p>縁有靈驗也</p>	<p>小。</p>
<p>(八五〇) 嘉祥3・5・丙申</p>	<p>武蔵国奈良神 ②</p>	<p>列於官社</p>	<p>忽和銅四年神社之中忽有湧泉、自然奔出</p>	<p>小。</p>
<p>嘉祥3・6・己酉</p>	<p>武蔵国廣瀬神</p>	<p>列於官社</p>	<p>忽和銅四年神社之中忽有湧泉、自然奔出</p>	<p>小。</p>
<p>常陸国鴨大神御子神主玉神</p>	<p>常陸国鴨大神御子神主玉神</p>	<p>列於官社</p>	<p>忽和銅四年神社之中忽有湧泉、自然奔出</p>	<p>小。</p>

日 本 文 德 天 皇 実 録										国 史
9	8	7	6	5	4	3	2	1		年 月 日
仁寿2・12・癸亥	仁寿2・閏8・丙子	仁寿2・7・辛卯	仁寿2・2・丁巳 (八五二)	仁寿元・12・壬寅		仁寿元・11・辛巳	仁寿元・6・戊午	仁寿元・6・甲寅 (八五二)	嘉祥3・12・庚戌 (八五二)	嘉祥3・6・庚戌
美濃国伊富岐神	遠江国息神	大和国都賀那木神	備中国吉備津彦命神	淡路国大和国魂神	大縣神	尾張国眞清田神	薩摩国賀紫久利神	近江国散久難度神	上野国甲波宿禰神	壹岐嶋角上神
	⑪ (從五下力)		⑩ (從四上力)		⑨ (從五下力)	⑧ (從五下力)		⑦ (從五下力)		⑤ (從四下力)
列於官社	列於官社	列於官社	↓四品 列於官社	列於官社	列於官社	預於官社	列於官社	列於官社	列於官社	列於官社
										此神叢社、瞰一臨大湖 …神實為之
	仁寿2・閏8・戊辰 (八五二)					承和14・11・癸酉	承和13・8・辛巳 (八四六)			延暦元・10・庚戌朔 (七八二)
小。	小。	小。	名神大。	名神大。	名神大。	名神大。	小。	名神大。	名神大。	名神大。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
					齊衡3・9・丁巳	齊衡3・5・戊辰 (八五六)		齊衡2・9・癸丑	齊衡2・7・壬申	齊衡2・2・癸丑	齊衡2・正・壬寅 (八五五)	齊衡元・10・戊辰 (八五四)	仁壽3・11・癸丑	仁壽3・7・甲午	仁壽3・6・甲戌	仁壽3・6・庚午	仁壽3・6・己巳			仁壽3・6・丁卯 (八五三)
					越前国天八百萬比咩神	山城国片山神	韓神	(宮中) 國神	紀伊国天手力男神	陸奥国永倉神	伊勢国阿耶賀神	山城国神足神	遠江国敬満神靈	駿河国浅間神	伊予国村山神	尾張国多天神	大和国金峯神 ^③	憶感神	大御靈神	尾張国大國靈神
								⑬ (從三位力)	⑭ (從三位力)		⑬ (從五位下力)						⑫ (從三位力)			
								列於官社	列於官社	列於官社	預於名神	列於官社	預於名神	預於名神	預於名神	預於名神	預於名神			列於官社
											承和2・12・甲申 (八三五)									
小。	小。	小。	小。	小。	小。	大。月次相嘗新嘗。	三座。並名神大。月次新嘗。		小。	小。	名神大。	小。	名神大。	名神大。	名神大。	名神大。	名神大。	名神大。月次相嘗新嘗。 (延喜式になし)	小。	小。

日本三代実録																		国史年月日
48	47	46	45	44	清和43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	神名
貞觀元・5・17壬申						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						相模国石楯尾神
肥後国阿蘇比咩神						山城国鴨川合神						天安元・6・甲申						出雲国大穗日命神
比売神						波比売神						天安元・8・辛未						常陸国大洗磯前神
聖神						大和国波賣神						酒列磯前神						
讚岐国雲気神						周防国二保神						播磨国大天神						
(4)						伯太姫神						伊勢国葭原神						
						河内国伯太彦神						天安元・8・丁亥						
						伯太姫神						(八五八) 天安2・2・丙戌						
												(八五七) 天安2・2・己丑						
												天安2・3・甲戌						
						天安2・3・己丑						天安2・3・丁未						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						
						天安2・8・丁未						天安元・5・丙辰						

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55		54	53	52	51	50	49
貞觀 6・8・14 戊辰	貞觀 6・3・丁亥朔 (八六四)	貞觀 5・12・9 丁卯 (八六三)	貞觀 4・11・11 乙亥 (八六二)	貞觀 4・11・乙丑朔	貞觀 4・11・乙丑朔		貞觀 4・6・15 壬子	貞觀 4・6・4 辛丑	貞觀 4・5・17 甲申 (八六二)	貞觀 3・2・13 丁巳 (八六一)	貞觀 2・10・15 辛卯 (八六〇)		貞觀 2・6・9 戊子	貞觀 2・5・20 己巳	貞觀 2・3・辛亥朔 (八六〇)	貞觀 元・10・7 己丑	貞觀 元・8・17 庚子	貞觀 元・7・7 庚申		貞觀 元・7・5 戊午
武蔵国蒲田神	美作国仲山大神	因幡国宇倍神	甲斐国大井俣神	河内国栗栖神	出羽国大物忌神	陸奥国鎮守府石手堰神	山城国大穗日命神	武蔵国金佐奈神	河内国田坐神	讃岐国田村神	河内国飛鳥戸神	“ 宿那彦神像石神	能登国大穴持神	讃岐国雲気神 (貞觀元・正・7 甲子)	近江国建部神	武蔵国磐井神	上野国倭文神	筑後国豊比咩神	“ 響雷神	大和国気吹雷神
(從五下) 列官社	(從四下) 預之官社	(從五下) 列於官社	(從五下) 預之官社	(從五下) 預之官社	(正四上 勲五等) 預之官社	(正八上) 預官社	(正八上) 列於官社	(從五下) 列於官社	(從五下) 列於官社	(從五上) 列於官社	(正四下) 列於官社	列於官社	(從五下) 列於官社	(從五下) 列於官社	(從五下) 列於官社	(正八上) 列於官社	(從四下) 列於官社	(從五下) 列官社		
			貞觀 4・4・12 庚戌				貞觀 4・6・18 乙卯	貞觀 4・8・6 壬寅 (八六二)	貞觀 4・4・26 甲子	嘉祥 2・2・癸丑 (八四九)	貞觀 元・8 (无位) ↓正四下 (八五九)				貞觀 5・6・8 己亥 (八六三)		貞觀 元・8・20 癸卯			
小。	名神大。	名神大。	小。	小。	名神大。	小。	小。	名神大。	小。	名神大。	名神大。 月次新嘗。	小。	小。	小。	名神大。	小。	小。	名神大。	二座。並名神大。 月次新嘗。	

国史	年 月 日	神 名	事 項	理 由	從五位下奉授時期	延 喜 式
69	貞観7・5・17丁酉 (八六五)	紀伊国堅真音神	(從五位上) 列於官社		貞観元・5・26辛巳 (正六上) ↓從五位上	小。
70	貞観7・6・22辛未	山城国天津石門別稚姫神	(從五位上) 列於官社			名神大。月次新嘗。
71	貞観7・12・9丙辰 (八六六)	甲斐国八代郡浅間明神	列於官社 (從五位下) 列於官社	往年八代郡暴風大雨 急有烟火。燒得嚴谷。		名神大。
72	貞観8・5・24丁卯 (八六七)	大和国平群郡雲甘寺楮本神			貞観3・10・22壬戌 (八六六)	小。
73	貞観9・2・26丙申 (八六七)	河内国大縣郡石神				小。
74		" 常世岐姫神				小。
75		" 志紀郡林氏神				小。
76		" 辛国神	預官社			小。
77		" 若江郡加津良神				小。
78		" 中村神				小。
79	貞観9・3・26丙寅	信濃国武水別神	(從二位) 列於官社		貞観8・6・甲戌朔 (无位) ↓從二位	名神大。
80	貞観9・5・21己未 (八八〇)	因幡国天穗日命神	(正二位) 列於官社			小。
81	元慶4・3・27庚辰 (八八二)	大和国城上郡宗像神	預於官社			三座。並名神大。月次。
82	元慶5・12・5己卯 (八八二)	尾張国中嶋郡額江神	(從五位下) 列於官社		貞観7・10・28丙子 (八六五)	小。

1) 82の番号は第二章第一節参照(補注④)

預官社時に從五位下以上(同時奉授も含む)

第一表 補注

- ① 高天彦仲は大同元年（八〇六）に四時幣帛例に預かり、のち承和六年（八三九）には従三位で名神化されている。
- ② 奈良神は嘉祥二年（八四九）と同三年（八五〇）に同じ官社化の記事があるが、但し嘉祥三年（八五〇）の方には、「詔」以武蔵国奈良神列於官社」とあり「詔」の字が入っている。故に嘉祥三年の記事の方を事実上の官社化ととらえる。
- ③ 金峯神は仁寿三年（八五三）に名神に預かり、そののち斉衡元年（八五四）六月甲寅朔に「預相嘗・月次并神今食祭」となっている。仁寿三年以前では祈年祭の班幣に預かるだけであつたのであろう。新嘗祭の班幣に関しては不明であるが、あるいは仁寿三年段階で祈年祭に加えて新嘗祭の班幣も受けるようになったのかもしれない。
- ④ 雲気神も②と同様、貞觀元年（八五九）と貞觀二年（八六〇）とに重複して出てくるが、貞觀元年の方のみに、「詔」以讃岐国従五位下雲気神列於官社」と「詔」の字が使用されている。故に当記事をとる。
- ⑤ 多度大神は、承和十一年（八四四）六月丙辰に正五位上から従四位下へ昇叙され、嘉祥三年（八五〇）まで神階記事は見えない。故に嘉祥三年の官社化時には少なくとも従四位下の神階はもっていた筈である。
- ⑥ 伊古奈比女神は官社に列せられる少し以前、即ち嘉祥三年（八五〇）十月壬子に従五位上を奉授されている。
- ⑦ 甲波宿禰神は承和十三年（八四六）八月辛巳、従五位下を奉授されて
- ⑧ 眞清田神は承和十四年十一月癸酉、従五位下を奉授され、そののち官社化時に至るまで、神階記事はない。
- ⑨ 大縣神も⑧の眞清田神と同年同月に従五位下を奉授されている。
- ⑩ 吉備津彦命神は承和十四年（八四七）十月用寅に无位から一挙に従四位下を奉授され、翌十五年（八四八）二月辛亥に従四位上に至っている。
- ⑪ 息神は仁寿二年（八五二）閏八月丙子、即ち十三日に官社化されているが、僅か八日前の五日戊辰に従五位下を奉授されている。
- ⑫ 金峯神は仁寿二年（八五二）十一月辛丑に従三位となっている。
- ⑬ 阿耶賀神は承和二年（八三五）十二月甲申に従五位下を奉授され、斉衡二年（八五五）正月壬寅（二十一日）に名神化されているが、僅か四日のちの正月丙午（二十五日）には一挙三階加進の従四位下へ昇叙されている。嘉祥三年以降の名神の神階上の優遇策を想定する私見（第二章第二章）を裏付けよう。
- ⑭ 園神は斉衡元年（八五四）四月癸亥に従三位に叙せられている。
- ⑮ 韓神も園神同様、斉衡元年四月癸亥、従三位に叙せられている。